

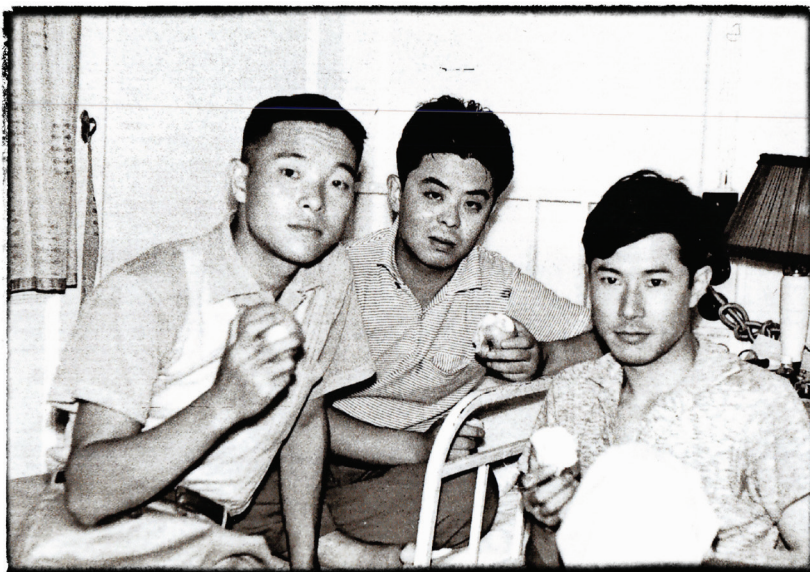
ミナワ(米国留学紀行)

徳永勉

1. 船旅

1957年8月28日、いよいよ出発の日となった。朝九段下のフルブライト委員会事務所に集合、確認を受けて、三々五々昼食を摂り、バスに分乗、横浜に向かう。この日は東京駅から臨時列車が出て横浜の埠頭に直接着くとのこと、家族はそれで見送りに来てくれることとなった。

永川丸は戦時中病院船として使われ、数少ない生き残りの船舶、かなり古い感じはするが、それでも乗り込むと立派な客船、ロビーや階段はホテルのよう。フルブライターは皆一等船客。手荷物を部屋に置き甲板に出る。見送りの家族も一部は船に乗り込み別れを惜しむ。やがて出発の時間が迫り、ドラが打ち鳴らされ見送りの人びとは下船、船客には紙テープが配られ盛んに埠頭に向かって投げ船と陸の繋がりとなる。タグボートが船を後ろ向きに牽き始め静かに動き出した。テープが伸びすぐ切れ始める。いよいよ別れの時、何か胸に迫る。



埠頭には泣いている顔もある。次第に埠頭の人々の顔がはっきり見えなくなる。タグボートが離れ船は前向きに自力で航行を始め東京湾出口に向かい南下、出帆約30分後、乗客は各等毎の

食堂に集められ密航者チェックが行なわれる。冷たい紅茶とケーキが出されほっと一息。自室に戻り荷物の整理を開始、お饅頭にもらったオレンジ、お饅頭、おせんべ、等好意の数々。カステラは早速同室の二人と共に食べる。同室の二人は共に京大出身でハーバードに行き、川又君は法学部の助教授で、年齢 26 歳、若い助教授なのが一驚。広中君は京大博士課程の数学者、同じく 26 歳。夕食は 6 時半から、一々立派なメニューが作ってあるのに感心。フランス語とチャンポンで何が出るのか見当がつかずボーイに一任。船窓からはまだ房総半島の民家の灯がちらちら見える。風呂は部屋に無いので交替、時間が割当てられ午前 10 時 20 分から 20 分間で入ることとなる。従って今晚は入れない。11 時ラウンジから戻ってベッドに入る。ベッドの割当ては年齢の順で、川又君が数ヶ月年長で窓側、小生が次で、壁側の下のベッド、広中君は小生の上段となっている。多少船がローリングを始めた。ぼそぼそ話しているうちに寝入ってしまう。夜中に時々眼が覚めたが、割合よく寝られた。

朝 7 時に起きて洗面後甲板に出る。東の方に雲があって太陽は見えない。海の色は今まで見たことが無いような、紺青色、如何にも深そうで黒潮の名にふさわしい。黒潮は 1 日約 10 ノットで流れているとのこと。その流れに乗って大圏コースをとって航行する訳だ。部屋に戻って地図と磁石で眺めたらもう北東に向きを転じていた。明日あたりから大分涼しくなるとのこと。

朝食はオートミールと魚のフライを食べる。例によって印刷したメニューが一人ひとりについている。朝食後ラウンジに行き雑談。科研の安藤氏、放射線物理学の土屋氏、オークリッジの原子力研究所に行くとのこと。東京高裁の藤井氏は小生の後輩有野さんが行く予定のテキサスの SMU に行く人、小生の名前を有野さんから聞いているとのこと。ボーイが風呂の準備が出来たと呼びに来たので中断。初めて洋式の風呂に入る。浴槽に横たわるが船が揺れるので身動き

が難しい。いくら石鹸を使っても映画の様に泡でいっぱいにはならない。どうやら海水も混じっているらしい。入浴後伯父が買ってくれたニコンの使い初め、部屋の三人で撮る。ガッチリした良いカメラ、伯父に感謝。

昼食は、スープ、雛鳥であとパイと葡萄を食べる。果物も食べ放題だが豊富なを見るだけで沢山になる。船が傾くのでスープは皿を傾けなくてもすすめる。腹ごなしに卓球をする。相手は J3 の宣教師、米国大学の学生で、3 年間日本で教育実習。汗をかき夕食まで涼む。夕食は 6 時半より、食後にアイスクリーム、桃が出る。8 時より映画、バラのトーナメント(ローズボール)と風流交番日記。お腹がすかないので、石川氏(エール大行き微生物学者)とブロムナードデッキを 7 8 回廻る。川尻先生、母の友人ピアノの先生と会社の小林嬢より電報あり、直ちに返電。電報は国内と同じ料金。11 時船長の告示に従い時計を 36 分進めて寝ることとする。少しローリング、ピッチングが出てきた。翌日は遭難訓練、皆救命胴衣をつけて、デッキに集合、写真を撮ったりでなごやか。危機意識は全くなし。

毎日の食事は一等の故か豪華。それでも運動不足と時差で食事時間の間隔が短くなるため食欲は余り起きない。船の揺れで船酔いをする人もある。同じテーブルの九大出身坂口君は豪傑、メニューにのっているのを片っ端からもってこさせて食べる。興銀の奥村君にはナイフとフォークを使い、上手に骨のある魚を食べる方法を教えてもらった。食事には毎回船長他幹部も同席、ネクタイを付け正装でなければならない。船の揺れが激しくなるとテーブルの上の皿や花瓶が滑るので、テーブルクロスに水を撒いたりテーブルの周囲に枠が上がるようになっていて落ちるのを防止する。船の揺れにより窓から見える景色が空から海へと絶えず変わる。こうなると食欲は益々減退する。

船旅に馴れた 3 日目からオリエンテーションや英会話クラスが始まる。英会

話の先生は二等、三等船客のアメリカ人。今までアメリカ人は進駐軍が学校の先生で、一段上の人の感じだったのが、下のクラスの船客になっているので奇妙。初めて米国に行く我々に親切に教えてくれる。

9月2日の朝は数日間の疲れが時差のためか、同室の三人共9時まで眼が覚めず遂に朝食を逃す。10時よりオリエンテーションがあるのでお茶とせんべいで出席。ただしお腹はそれほどすいていない。今日は主として米国の政治についての話。6名ずつのグループに分かれ自由討議の形式で行なわれる。昼食の頃から船が非常に揺れ出す。今日180度線通過のため9月2日Bという日になる。通過は昼頃とのこと。夕食はすき焼きパーティ、神戸肉の上等なもの美味しい。食堂のネジで止めてあるテーブルを全部外し、莫座を敷き七輪に炭火で日本酒も出て盛大。我々も船の揺れに馴れてか、よく食べた。

昨日寝過したので今朝は目覚ましをセットして8時に起きる。8時は遅いようだが、日本時間より約4時間早くなっているのだから4時起床である。船の揺れはやや少なくなった。食欲もあり快調。昨夜就寝前にAデッキを10回ランニングした効果か。食後間もなくオリエンテーション、今日は米国における日本人一世、二世について。引き続きラウンジで政治、経済に関する講演会。藤井さんよりジラード事件について、陪審員制度や傷害致死が過失致死か、審判手続きの問題等時宜を得た話があり、その他三四人から夫々の分野から米国で話題となるべき問題の解説があった。

昼食後ブリッジの見学が行なわれ初めて操舵室に入り、船の航行上の説明を聞きレーダー等を見る。帰途三等に行き、母の友人東洋英和の酒井先生の教え子平井夫人と子供たちを一等の方へ連れだし写真を写したり、トランプをしたり、平井さんは岩井産業のニューヨーク支店勤務のご主人に合流するための渡米。9月4日は夕食後ビンゴゲームが行なわれ、賞品として菓子鉢をもらった。

5日は船の揺れがひどくなり、きしむ音が無気味に響く。食堂で食事中ナイフやフォークが滑ったりグラスが落ちて割れたり、部屋でも出発前に寿司屋で貰った大きな茶碗が割れてがっかりした。気分が悪くなりそうな時はレインコートを着て甲板に出るに限る。出帆後3日目くらいから船のあとを信天翁（編集部註：あほうどり）が7-8羽ついて飛んでいたのが大分増えて来た。船が捨てる残飯を食べるらしい。午後のお茶の時間は完全な洋式ティパーティでフルブライトの女性達がホスト役をこなした。マニフ、チェコスロバキア元大蔵大臣、現在ワシントン大学教授がスピーチを行なった。船旅の時間を持て余した藤田さん達女性は童心に帰り隠れん坊をしたり。

6日はいよいよ上陸後の準備につき打ち合わせが始まり、長いと思っていた2週間の船旅が余りにも早かったのに驚く。7日も引き続き上陸手続きの説明があり検疫、移民官の検査、通関手続き等かなり面倒な様子。夜はお別れのダンスパーティ、フルブライトの女性達は少なくおもてだった。特に東京女子大の三沢さんは上手でステップが軽いと評判。8日陸が近くなったせいか、今までにない素晴らしいお天気で気持ちが良い。日曜日で礼拝があった。船客の中に四人も牧師がいてその内一人は女性。昼頃には遂に雪の中に霞んでカナダのバンクーバー島が見え始める。としているうちに漁船とおぼしき白い小船が一隻近づいて来た。気がつくとも航海中後をつけてきた信天翁は姿を消し、カモメのような海鳥が飛んでいる。夜になり部屋で手紙を書いていると同室の連中が呼びに来た。甲板に出て見ると陸の灯がキラキラ輝き満月の月とマッチして実に美しい。いよいよ明日は上陸、ホテルに手紙が来ているのが楽しみだ。

2. 大陸横断

9月9日、船の中で同室の川又君に起こされた時は既に五十番棧橋に横付けになって居り、眠い目をこすりながら船室の丸窓から首を突き出した途端に五角形の塔、後でスミスタワーと聞いたが、眼に飛び込んできて異国に来た事を強く印象づけられた。上陸手続きは朝の6時から船内で始まり移民官、検疫官等が乗り込んで来て、我々の書類を調べ始めた。並ぶのが遅かった為、段々に遅れ、結局船内の手続きが終わったのが9時、それから朝食をとり、ワシントン大学の出迎えの学生達に会い、その後番号順に上陸、10人ずつ区切り、適当な間隔を置いて船から下りた。すぐ前にある倉庫には既にホールド・バグゲージに入れてあった荷物、ボーイに運んでもらったスーツケースがABC順に分けて置いてある。陸上の倉庫なのに揺れている感じがする。2週間船で揺られた感覚が体に残っていてそうなるらしい。

Tの所へ行き自分の荷物をまとめ、税官吏に見てもらう。スーツケースを開けさせられ、一寸のぞいていたがすぐOK。何か食物を持っているかと聞かれたので、せんべいを説明したら別に問題はなかった。柑橘類を持ち込むことを禁止しているのでそうゆう点注意しているのだろう。お土産類は10ドル以下となっている。それ以上は税金をとられる。多分換算するとお土産と思われる品物は10ドルをやや超えると思ったが、面倒なので10ドル以上持っていない事とした。まあ無事に税関は通過したので一寸街に出てみる。二階建てになったハイウェイがすぐ目の前にある。付近を一回りしたが、商店に出ている下着の高いのがすぐ目についた。一寸厚手ではあるが肌着が2ドル以上する。戻って見たらバスが既に来て第一陣は出発するところ。第二陣のバスを待ってホランドホテルに向かう。乗ったと思ったらすぐ着いた。日系人の経営しているホテルで、まだ日本語が通用する。部屋は最低の3ドル50を広中君と一緒に使う事にした。

ダブルベッドが置いてあり、洗面所、鏡台、洋服掛けのクローゼットが付いていると云えば立派に聞こえるかも知れないが、アメリカの基準からすると非常に粗末なもの。絨毯も敷いてあるが破れたのが繕ってある。それでも船の中に較べれば広いのがなにより。この日は早速町に出て見物。シアトルの街はやや薄暗い感じがする。更に高齢者、身体障害者が街に多い。彼らは年金で暮らしているとの事だが、街の所々にあるベンチや木陰で休んでいる。日本ではあまり見られぬ風景。日本が家族国家の故か、米国の社会保障制度が完備している故か。夕方街に出てチャイナタウンと呼ばれる所にある日本人のグローサリーに入る。ここでも日本語が通用。夕食は思い切ってCAFEに入る。レバソーセージのサンドイッチとミルクで45セント、他に2セントのTAXをとられる。夜は川又君の部屋で風呂を使わせてもらって寝る。広中君とダブルベッドで、夜中に寝返りをされ時々目が覚めた。

朝電話で起こされて、川又君の部屋に行き、四人で朝食、船で同室の三人に早稲田の浜中君が加わる。この朝食はお金を節約する為、前日日本人の店で買って置いたパン、サーデン、オレンジ、V8 と称する野菜ジュース。忘れていたがもう一軒の店で日系の婦人から日本円を持っていないか聞かれ千円を3ドルと取り替えた。日本にいる親類に送金するとの事。千円札でなければ困るとの事で二千円だけしか取り替えられなかった。そうそうもう一つ、手紙は全部で14通、日本から12通、米国内からは大学のアドバイザーと銀行から。銀行からの手紙を持って指定された銀行の窓口へ行き50ドルの旅行費用を手にいれる。午後YMCAをたずね昼食をとり、サイトシーイングの手配をしてもらう。船の中から見えたスミスタワーにも昇って見る。この建物はミシシッピ河以西で最も高いとのこと。塔の展望台で、売店の女性に、日本で問題となっているグラード事件に関し議論を吹かけられた。観光はオリンピックホテルの横から出

ているグレーラインのバスで山の手、ワシントンレーク、大学等約 2 時間のコース。レークに掛かっている橋は真中の部分が水の中に浮きドックになっている。大学は広大な立派なキャンパス。見物を終わって帰り再び街に買物に行き、パン、缶詰等 4 人分 3 日間の食料をとして 14 ドル程を購入。夕方 7 時にはもうバスが来て出発、キングステーションに行く。鉄道の切符はクーポンになっていて手帳のような感じ。乗る鉄道はグレートノーザン。プルマンの寝台車と云うので期待していたが日本の昔の二等寝台と同じ程度。ただしこれは我々団体の為に出して来た古い今はあまり使わぬものらしい。ポーターは皆黒人。我々の車のは大分白人の混血か、顔立ち以外は全く白人のよう。米国の鉄道は時間が不正確と聞いていたが大体定刻に発車。発車の際ポーター達が各乗車口に並んで一斉に『オールアボード』と怒鳴るが、我々には『ワンワン』と云っているようにしか聞こえない。寝台の毛布は我家にもある米国から送られた援助物資のプルマンの毛布と全く同じものが使われているので、余計古くさい感じがする。鉄道は広軌と言うが揺れがひどく、音もうるさい。窓ガラスが二重になって居り、エヤコンもしているが、どう見ても日本の東海道線には劣る。他にもいたが、我々四人買い込んできた食料品で毎回の食事を済ませる。まるでキャンプ生活をしているようだ。クラブカーと言うのが付いていて、ソファやテーブルセットが置いてありこれはやや豪華な感じはする。ボーイに頼めば、何でも持って来てくれる。コカコラを飲み初めてチップを払った。どうも高くて仕方がない。

シアトルのあるワシントン州から翌朝はモンタナ州に入りその次の朝もまだモンタナ州、アメリカ大陸の大きさをつくづく感じさせられた。シアトルで南の方向に行くグループと別れ、更に列車の進行の途中で下車となる連中もあり段々人数の少なくなるのは何となく心細いもの。ミネソタ大学に行く三沢さん

は真夜中にミネアポリス駅に着き一人きりでベソをかいていた。13 日午前やっ
と乗り換え駅のシカゴに到着、船のルームメートともお別れ。時間があり、駅
構内で別れを惜しみつつ川又君と歩いていたら自動販売機がルートビヤーと云
いのを売っていた。ビールと喜んで川又君がコインを入れて手にし一口飲み吐
き出した。ビールとは似ても似つかぬ葉臭い飲物とのこと。

シカゴからは同じイリノイ大学に行く早稲田卒業の女性でソーシャルワーク
専攻の深沢さんと二人旅となる。目的地シャンペインへ行くイリノイセントラ
ル鉄道は夕方まで待たねばならない。その間二人でシカゴ見物。シカゴで一番
高いビル、プルデンシャルに昇る。エレベーターの早い事、あっという間に
展望階に到着。その後美術館に行く。ルノアールの絵が沢山手で触れられる
位置に展示されているのに感心。夕方までなんとか時間をつぶし、列車に乗り
込む。シャンペイン駅に着いたのはかなり夜更け、それにも関わらず日本で名
前を紹介されて手紙を出して置いた YMCA のブライス氏が出迎えて待っていて下
さる。深沢さんは YMCA の近くの個人の家に小生は YMCA に泊まる事になり旅は
一段落。

3. 定着

翌日は早速学校に行き、と言っても YMCA が学校の構内にあり、歩いて数分の
建物がアドミニストレーション、外国人学生担当スカイトマン部長に会って入
学手続き、英語のテストを受けたり、専攻のマーケティング料の科長ヒュジー
教授に会って授業科目の選択の指示を受ける等、何しろ 18,000 人の学生がいて
外国人学生も非常に多く、新着の我々を特別に配慮という訳にはいかない、初
めから米国人学生と同じ様に、あちらこちら行かされ、自分で全ての用を足さ
ざるを得ない。それでもなんとか言われる通りに動き学校の手続きは完了。さ

で次ぎの問題は住居探し、学校の寮はアンダーグラジュエートしか入れず大学院生は下宿等プライベートの住居しかない。学校の住居斡旋課に下宿等のリストは置いてあるが、条件や様子は余り書いてないので一々電話を掛けるが、自動車で見えて廻らなければならない。途方にくれてリストを眺めていたら突然スペンサー氏が現れた。スペンサー氏は日本で受講していた英語学校の先生で、イリノイ州出身の軍属、米軍家族の高校教諭、留学が決まってから種々と親切に日本でも付き合ってくれ、彼の住んでいたワシントンハイツにも招待されアメリカ生活に馴れる様計らってくれた人。ある時留学してなにをしたいか、との質問をされ、出来るだけ多くの人とインターコースをしたい、と答えた。学生時代英語の教科書にエシックスフォアヤングピープルと言う本が使われ、その中にヒューマンインターコース(人間の交際)と云う章があったので、交際の意味で言ったのだが、彼はそれを察して用法が不適当な事を教えてくれた。イリノイでいつか会おうと別れ、彼の方が先に帰国した。まったく忘れていたが、彼も教師をしながら母校で更に単位を取りたいと云っていた。その単位の登録に来ていたとのこと。早速住居探しを手伝ってやろうと彼のシャンペインの友人の家に連れて行き、そこであちこち電話をして尋ねた末、かねがね聞いていたコオペレティブハウスを見つけた。再び彼の自動車に乗りそこを訪ねた。このハウスはクリスチャンの学生ばかりで組織され、玄関を入った所にはイエスの画像があり、客間には『この家の主人はイエスである』との標題が掲げられている。条件は1セメスター300ドルで部屋と三食付、一週3時間の奉仕が要求される。住んでいるのはアメリカ人学生ばかり23人。願ったり叶ったりなので早速入居を希望したが、種々願書に記入をさせられ、相談して決めるとのこと。翌日午後4時に再び訪れる事として辞去。翌日行くとそのハウスのエキュゼキュティブメンバーが8人ばかり集まり、種々聞きたいと云って、主としてキリス

ト教の背景であったが、質問を受け、ミッションスクールの出身であることや高校時代洗礼を受けた事、継父が牧師で日曜学校の教師をしていたこと等々話す。約 15 分程席を外さされ相談し、その後おもむろに入居を許可してくれる。彼らは皆アンダーグラジュエートだが真面目で大人びていて、煙草を吸うのもしない、真面目なクリスチャン学生。入居と決まったら早速そのうちの一人が自動車で YMCA に行き荷物を運んでくれた。

ミナワは木造のやや古い大きな住宅。一階に応接室、リビングルーム、食堂、台所があり、二階には個室が 5 つあり、これが勉強部屋でルームメートは四人、寝室は三階で二段ベッドがずらっと並んでいる。

ミナワの生活は快適。全員アンダーグラジュエートだから年下だが、しっかりしていて大人っぽい。前から住んでいて正式メンバーとなっているのはアクティブと呼ばれハウスの運営に参加し、その中から役員としてプレジデント、バイスプレジデント、セクレタリー、チャプレン、トレジャラー、ハウスマネジャー等が選ばれ種々責任を負う。新入生はプレッジと呼ばれ、ハウスの掃除や雑用を毎週 3 時間奉仕することが要求される。食事に関しては、朝食は各自勝手に食べるのだが、シリオ、ジュース、ドーナッツ、牛乳等、昼食と夕食は雇っている黒人女性のコックが来て調理してくれる。食事の際交替で週 2 回当番があり、白い上着を着てボーイの役をする。食器を並べたり、料理を運んだり、水や牛乳を注いだり、食後はテーブルの片づけ、皿洗いをする。最初の頃、ハウスマネジャーのノーム ロードンがプレッジにテーブルマナーを教えた。テーブルには五人が座り、角に座ったのがテーブルマスターとなり、お代わりや追加の要求はマスターを通して行なう。何かあるとマスターが手を上げボーイに依頼する、勝手に要求は出来ない。食べ物を出す時は右隣へは左手に持って、左隣には右手に持って出す。その他フォークナイフの使い方等々米国式マナー

を教育、中々厳しい。食事の前には役員が指名して食前の感謝の祈りをする。学生が自治的にやっているのだが、誠に整然としている。顧問の先生がいるのだが、日常は全く干渉しない。コックを雇ったり、シカゴの屠殺場から直接肉を買ってきたりするの、トレジャラーのディック ライケルがやるとのこと。御蔭で食事の内容も栄養たっぷり。牛乳は専用の冷蔵庫に業者が大きな缶で置いてゆき、栓を押すと自由にコップで飲めるようになっていて、食事以外の時に飲むのは追加費用となるので、張ってある紙に名前を書いてチェックする。兎に角住食の心配が無く、ハウスの連中が親切にしてくれるので居心地は最高、3日目に日本にいる夢を見たら、なんで帰って来たのかとがっかりして目が覚め、まだここにいると嬉しくなったくらい。快適なミナワ生活でただ一つの難点はトイレ。トイレは二階にあるのだが、大きな部屋にシャワーボックスが1つ、洗面台が3つ、それに便器が2つ並んでいて、何も困りは無い。便器に並んで腰掛け、昨日のテストはどうだったなどと話し合っているが、とてもこちらには出来ない芸当。止むなく当分学校の図書館で大きいのは用をたす事とした。



4. 学校

さて授業は水曜日に初めて出席、船の関係で新学年の開始に数日遅れ、既に講義は始まっていた。それでも各教授がいつでもわからないことは自分の研究室に來いと親切に呼んでくれ、実際に言葉の問題もあり講義のわからない点も少なくないが、やっている内容は易しい事なので、馴れれば何とかなるだろうと感じた。ただやはり準備にかなりの教科書を読まねばならず、課目は少ないのだが、時間は必要で、毎晩遅くなり、睡眠不足の気味で、これが祟り今度は授業中に眠くなり講義が耳に入らず、睡魔と悪戦苦闘せねばならない。特に昼食直後の授業がいけない。学校のキャンパスは素晴らしく大きく住んでいるハウスはキャンパスにととても近いのだが、それでも教室まで歩いて約20分はかかる。学校内をバスが走っているがこれは身体に障害があり車椅子を使用している人のみ乗ることが出来る。校舎にエレベーターがあるがこれも身体障害者専用。そもそも州立の大学は州から広大な土地を貰って学校を設立、ランドグラウンテッドスクールと謂れ、イリノイ大学のキャンパスは各学部の校舎、実習用農場、飛行場(シカゴのミッドウエー空港より大きい)専用飛行機タグラス DC7があり、フットボールの選手の移動等に使う、大学独自の警察、消防署、病院、フットボール・スタジアム、劇場、ゴルフ・コース2つ、その他あらゆるスポーツ施設等等まさに一大都市の機能を備えている。電気工学部の建物の上には大きなパラボラアンテナがあり月々の電波反射実験がなされた等々、前に犬養美智子さんが留学した時の記事を文芸春秋で読んだが東京都の予算とほぼ同額の予算で運営されているそうだから大きいのは当然、学校の行き帰りは急ぎ足で歩かないと間に合わない。講義を聞いても予めアサイメントで予習してある事は見当がつくが、たまに先生がジョークらしきものを言われるのがさっぱり分からない。皆が笑っていてもこちらは笑えない。もっとも級友の話では軍隊

帰りの教授のスラングが分からないことがあるとのこと。小生の専攻のマーケティングは日本で盛んにもてはやされたオペレーションリサーチやリニアプログラミングとは全く関係なく、商業学的な販売を中心とした学問でいささか期待外れであった。一学期に取らされた科目は、信用供与と回収、工業マーケティング、セールスマンシップ、二学期にはマーケティングの方法と問題、小売業の仕入れ、販売管理、広告政策及び問題点、夏学期は商品計画政策と問題点、卒論準備、2年目一学期はマーケティング理論と問題点、卒論と言った具合で極めて実践的な授業であった。例えばセールスマンシップの授業では、教室で他の学生を客としてなにか実際の品物をもってきて売り込む実演をする。小生は伯父が饞別にくれたニコンのカメラを商品にを使って宣伝。ケーススタディーも多く、なかには実際に起った会社の事例があり、図書館で資料や雑誌を調べ結果に対する批判や対策など実際の米国らしい勉強方法であった。

中味は実際のことで難しいものは無いがかなりの量の資料を読まねばならず、纏めてレポートをタイプして準備せねばならず、語学のハンディがある身には負担ではある。それでもいつの間にか馴れて、初めは講義の内容を頭の中で翻訳していたのが、英語そのまま理解するようになって来た。意外だったのは適正在庫の問題を出された時、これが丁度数学の二次方程式に当てはまるので、式を立て極大点を求め平方根で答えを得たのを黒板に書いて説明したところ先生も含めて誰も分からない。初めて日本の方が数学の教育が進んでいるのを知った。寮でも航空学科の学生に微分方程式の問題を教えたらお前は文科系だろうと驚かれた。米国の高校では計算尺すら教えて居らず、計算尺は理科系学生のシンボルのようになって腰にぶら下げている。たまたま留学中にソ連がスポーツニックスを飛ばし米国はショックを受けたが、理数系教育の遅れが問題となったのも良く分かる。ついでながら卒論で販売予測のテーマを選び、数学的方

法で $y=f(x)$ とかの記号を使ったら、担当教授にこりゃなんだと追求された。それでも先生達は皆親切で、下手糞な文章で書いたレポートを割合良く評価して下さり合格点を与えられた。大学院は平均点で 80 点以上を維持せねばならず、一学期に 1 科目が 70 点台となりひやりとしたが、次の学期で 90 点台の科目もあり何とか基準に達した。米国の大学は基準の平均点を維持出来ない、次の学期は猶予期間となり、ここで基準に達しないと、1 年間学校から追い出される。そして一定の年内に所定の単位を取得しなければ学位が貰えない。日本のように入学さえすれば卒業はそれほど難しくないのとはいささが違い、大学はクイズ、テスト、レポート、学期末試験等絶えず追われ絞られる。学期末試験は各課目 3 時間ぶっとおしの試験。日本の学生時代のつもりでテニスでも時々やるつもりが一学期間は全くラケットを手にする事が出来なかった。それでも折角米国の大学に来たのだからそれらしい学校のイベントは見てやろうと、フットボールの試合、バスケットの試合、演劇、音楽等の催物は出来るだけ参加した。音楽ではマリアンアンダーソンやルイ・アームストロングを聞くことが出来た。

話は前後するが、キャンパス到着後 1 週間目の週末 YMCA 主催の外国人学生歓迎のキャンプがあり、大学の所有する学校からはかなり離れたアリントンパーク、大きな公園の大きなキャンプ場に招待された。外国人学生その他米国人学生も参加、約 300 人が集まり、州の副知事も顔を出し、盛んな歓迎をしてくれた。フランス、イタリア、キューバ、エチオピア、スエーデン、オーストリア、インド、メキシコ、カナダ種々の人種が入り混じり一緒に合唱したりスクエアダンス、スポーツ、ゲームに興じ大騒ぎだった。日本だったら映画女優になれそうな美しい女子学生（コーエドと呼ばれる）が沢山いて、彼女達と腕を組んだり踊ったりで圧倒される思い。米国人学生の明るく陽気で親しみやすい態度に

すっかり魅惑された。小生はサッカーをやり自分で自分の足を蹴って怪我をし
てしまい、キャンプから戻ってから化膿し靴がはけなくなってしまった。しば
らく日本から持参のゴム草履で通学する羽目になった。大学の病院で診てもら
ったら医師がぬるま湯に浸けると云う日本と全く違う療法だったが、やってみ
ると効果がありやっとなおした。入学早々の災難。10 月に入るとそろそろ寒さが
感じられスチームを通すようになった。土曜日にフットボールゲームがあり初
めて見たが、怪我人続出で救急車が待機していて壮観、体格の良いえり選った
選手達が死に物狂いで暴れるのだから面白い訳。コルーゲート大学を相手に 40
対 0 でイリノイ大が勝利。ちなみにフットボールの切符はシーズン通して 13 ド
ル 20 セント、これにはバスケットの試合も含まれその都度買えば 50 ドル以上
になるとのこと。ここでちょっと経済状態の説明をすると、日本出国時持ち出
しを許されたのが 30 ドル、シアトル到着時銀行で受け取れたのが 50 ドル、ド
イツ人の叔父から融通してもらい学校到着後ニューヨークの銀行から転送され
てきた 300 ドルが手持ちの全て。これから旅行中の食費、ミナワ入寮の際 100
ドルの運転資金預託、1 カ月分 65 ドル、タイプライター購入で 110 ドルその他
教科書、文房具、雑費を払ったら手元にはほとんど無くなり、当てにしていた
大学のフェローシップは 9 月は半月分 66 ドルしか支給されず予定が狂ってしま
った。スカイトマン外国人担当部長に相談したら学生ローンとして不足分を貸
してくれたのでなんとか凌げたと言う状況。13 ドル 20 セントはいささか贅沢か。
授業の方も次第に馴れて、講義を聞くのも自然に受けとめられ、一学期にはデ
ィスカッションにもついていけるようになってきた。学生の中には意外と年配
の連中がいて聞いてみると GI ビルといって軍隊に勤務し、兵役後政府の奨学金
を貰って大学で勉強をするとのこと。又学生がかなり陸海空軍の立派な制服を
着て構内を闊歩している。これは ROTC（予備役将校訓練コース）を取っている

学生で、卒業後入隊すればすぐ将校に任官される由。アーモリーと云う大きな建物があり、中には戦車や大砲も置いてある。何か戦時中の日本の軍事教練を思い出された。

一学期の終わり頃には早くも卒論の準備をしろとの指示が科長からあり、鉄鋼業の販売予測方法をテーマとして選び、そのためアンケートを作成し大手の鉄鋼会社に送った所、ほとんどの会社が回答をしてくれたのには感激した。日本の会社だったら学生を相手にこれほどの応対してくれるだろうか。兎に角最後まで言語のハンディキャップはあったが一応順調に学校の課程は終了しマスターの学位を頂戴した。

5. 日常生活

米国の食生活が豊かなせいか、ミナワで暮らし始めて1、2カ月後には足の膝がふっくらとして太って来たのを感じた。学生時代テニスシーズン中は48キロ、オフには53キロで安定して卒業後も変わらなかったのが、気がついた時には63キロと10キロも増えていた。戦時中、中学3年生の1年間疎開しその間栄養失調で東京に戻って身体検査をしたら戦災を免れた1年生の時の記録があり、あの発育盛りの14,15歳で身長、体重、胸囲が1センチ、1キロも変わっていなかったのに驚いたが、これをこの年になって取り戻したようだ。

週末スポンサーに誘われて彼の家を訪問、最初彼の婚約者の住むスプリングフィールドに行き夕食をご馳走になった。スクランブルという単語綴りのゲームをしてゆっくりし、丁度満月の真夜中のハイウェイを70マイルの速度で飛ばしてモデストという人口300人の田舎町に到着。日本なら辺ぴな場所の百姓家だが、電気冷蔵庫は勿論、オーブンレンジ、給湯設備、水洗便所でテレビ、ピ

アノもあり、このピアノはスイッチ一つでハモンドオルガンにも切り替え出来、両方の音色が出せる。彼の父親は70歳で農業は引退、家で鶏を300羽程飼っているだけ。その他銀行でジャンターをやっているとのこと。午前中村の教会に出席、東洋人等見たことが無いのか、隣に座った小さな女の子に時々恐る恐る見上げられて閉口した。午後は再びスプリングフィールドに行きリンカーンが大統領に当選するまで住んでいた家を見た。1860年当時そのままに保存し、無料で公開されている。今とは比較にならないが、非常に質素なもので、大きさも日本の我家くらい。お墓は非常に立派なものでいかに人々から尊敬されているかを十分示すもの。胸像があり、鼻を触ると出世するとのジンクスがあって大勢が触るのが、鼻だけが光っている。イリノイの自動車のナンバープレートにはランドオブリンカーンと州の美称が入っている。帰途はスペンサーがバスの切符を買ってくれ、初めて約3時間のバス旅をした。

ミナワでは毎週月曜日の夜は教会の牧師が招かれ、1時間位の礼拝を行ない、火曜日の毎夜10時から30分聖書研究、金曜日は大学のクリスチャン学生の集会、映画会、ピクニック等がある。その他種々の行事やハウスとしての作業もある。ホームカミングの週には家の前に大がかりなデコレーションを作った。テーマは兎と亀の駆け競べで、後ろで人力で画面を回転させて動かして見せる。日本の童話とばかり思っていたのがびっくり。真夜中のハイキングと言うのはプレッジが約15マイル程の地点に車で連れていかれ、ハウスまで歩いて帰らねばならない。ヘイライドと云う行事は皆楽しみらしい。農家の荷馬車に千草を積んでこれを馬ならぬトラクターで引っ張りドライブする。この時には必ずデートする女子学生を同伴、そろそろ寒いので、二人ずつ寄り添って毛布をかぶって寒さを凌ぎながらのドライブ、約3時間。小生も紹介してもらったテキサスから来たコーエドと初めてデート。彼女の薄荷系の香水が爽やかだった。散々

冷え込んでから、火を燃やしてホットドッグを食べたりチョコレートを飲んだりと云うところで、開拓時代を偲ぶ為の行事か。

サンクスギビングの休日には寮友達数人から招待を受けたが、学校のレポートと日本の会社からの宿題もありシカゴの鉄鋼関係の会社を訪問する為、シカゴのロードンの家に行くことにした。ロードンはミナワのマネジャーで工学部の4年生、威厳のある役員だが、休日前から口髭を生やして家族や婚約者を脅かそうとしていた。ところが威厳が益々加わったのに反発したのか、出発直前に寮友達数人に取っ捕まって、折角の髭を剃られてしまったのは気の毒だった。彼の家はシカゴ南端のアバート街にあり、両親と息子一人の家族。狭いアパートなので両親のベッドルームを空け、ロードンと小生が寝るようにしてくれ、両親はリビングのカウチをくっつけて寝るというサービス。朝から美味しいホットケーキを作ったり、ご自慢のスエーデン風の料理をして歓待してくれ、サンクスギビングのご馳走は、ロードンの婚約者の家で皆集まり賑やかに祝った。婚約者は可愛い女性でシカゴ独特のアクセントで話し、ユウノウが口癖の様子、こちらはアイトントノウとからかいなくなる。会社訪問もロードンが付き合ってくれ無事目的を達成出来た。

ミナワの行事の一つとして女子のコーオペレティブハウスとの食事交換会が行なわれた。こちらから半数の寮生が女子寮に行き、向こうから半数の女子学生が来て食事を楽しむ。女子寮に行かされたが、女子寮には舎監のようなハウスマザーがいて一応監督はしているが、やはり学生が自治的にやっている。

ハイ、ベン（勉を音読みにし小生のニックネーム）今東京は何時だ？午後2時頃だ、それでは電話を掛けてみる、冗談じゃない料金が大変だ、どやどやと他の連中も部屋に入って来て、かまわないから掛ける料金は心配するな、我々のクリスマスプレゼントだ、という訳でクリスマス前の試験の最中東京の自宅に

電話をした。短波のウエービングが激しく、中々話しが通じず、散々もしもしをくりかえさねばならなかった。後で聞くと、約 1 週間まえから皆で計画し、日曜日の夜皆の集まったところでやろうと、会計系のディックが長距離を呼びだし、まずシカゴ、続いてロサンゼルスそれから日本の電話番号を申し込み、一旦切って待つ、それから約 1 時間、11 時にやっと通じた。その間寝巻を着た連中までも起きて待ち、ノームはテープレコーダーを準備、この間はガールフレンドから掛かった電話も、今国際電話を申し込んだから後で掛けてくれと断る始末。ベルが鳴る度に皆ばたばたと集まり何度か失望、皆が楽しみにしてくれた。

3 分 20 ドル、聞こえが悪いので時間が掛かり 6 分以上話したのではないが。週末家に帰れない外国人学生への思いやりと有難く感謝した。

クリスマス前 23 日、ハワイから来ている 2 世の友人がシカゴに行くと言われ丁度既に帰省している寮友ホームズに頼まれた下駄が日本から届いたので、届ける為同行、その夜は彼の家に泊まりシカゴのクリスマスの夜景をプルデンシャルビルから眺めたり、翌日クリスマスイブのご馳走になって帰途についた。シカゴのミシガン通りの一つ裏通りをイリノイセントラルの駅に急いでいた時若い黒人の三人組に、ハイジャパンと友人から貰った日本航空のバッグを見てか呼び止められ、金を出せば無事に行かせてやると言われた。咄嗟に英語が分からない振りをしてとぼけていたら、丁度酔っ払いが通りかかり、なんだなんだと寄って来たので三人組は離れて行き危機一発難を免れた。この酔っ払いは様子を見て助けに入ったと、この後一緒に歩きながら説明、助かった。シカゴはやはりギャングの街が。

クリスマス休暇はかねてから連絡を取っていた、継父のノースウェスタン大学の学友で、メソジスト教会ウィスコンシン地区ビショップのノースcott 牧

師宅で過ごすこととなった。娘さんがイリノイ大学の町の近くに住んでいるので訪問を兼ねて小生を迎えに来てくれた。大きなキャデラックで、60 歳は過ぎていると思われるが、時には 80 マイルで飛ばすのは驚き。イリノイのシャンペインからウィスコンシンのマディソンまで 280 マイル以上を 1 日で旅行、途中知人宅元ノースウエスタンの学長を訪ねたりして約 10 時間、夜 7 時半到着。マディソンは州首都とは思えない静かな町でノースコット家は西の外れ近く、それほど大きくはないが、ガレージの付いた設備の良い家。ガレージの扉は車から電波を出すと途端に電灯が点いてするすると開き、まるでアラビアンナイトの開けごまのよう。

数日後、最近行かれた南米視察の報告会をする為、アップルトン、グリーンベイ、ワソウの都市を三角形に約 425 マイル、途中雪の降る日もあり、3 日間で巡回。集会は各市の大きな教会で夜開催、まず夕食会では夫人が自分のハンドバッグを主人公にして三人称形式ユーモアたっぷりの話で一般的な報告、ついでながら夫人はアイゼンハワー大統領と幼な友達の由。食後は礼拝堂に集まり礼拝を兼ねてスライドを使い南米のメソジストの現状を説明。小生も食事にはメインテーブルに座られ、神学校の親友の息子と紹介され、スピーチをやらされた。人口はそれほど大きな都市ではないが、どの教会もパイプオルガン、マイク設備、2-300 人の対応出来るキッチン食堂があり、全く経済力の違いを感じさせられた。

クリスマスは教会やノースコットさんの秘書が若い人達の集まりに連れていってくれたり、州議会の見学やらで忙しく楽しく過ごし、元旦にはディクタホンと云う小さな円盤に録音出来る機械で新年の挨拶を吹き込み日本に送ってくれた。これは 33 回転の LP プレーヤーで聞くことが出来る。留守宅には良い贈り物。クリスマス休暇が終わると、間もなく学期末試験、急ぎシャンペインに

戻る。

ミナワではゴスペルチームを編成して、近辺の教会に行き礼拝を担当する様な活動をする。小生も時々動員され日本語で賛美歌を歌ったり、時には証をさせられた。賛美歌は子供の頃から歌いつけているから問題ないが、証は実は洗礼を受けたのが、親友の付き合いで受け、信仰体験は無いのでいささが困った。家庭も学校も基督教の環境だったので、基督教シンパというのが実情。それでも止むなく責任を果たした。礼拝が終わってからサインをして欲しいと云われたり、ある時には小学生の女の子が写真をくれたりして面はゆい思いをした。ミナワの連中は熱心なクリスチャンが多く時には議論が白熱し、なかには進化論を否定するのもあった。皆新教ではあるが種々の教派からきていて、習慣が違い、中にはドイツ系のレニー マイヤーの教会では、聖書にある清き口づけをもって挨拶、と云うのを実行して男同士も接吻するのには驚かされた。

6. ワシントン旅行

学期末休暇に YMCA の主催で、政治セミナーと称してワシントン DC に行くグループに参加。一行は 12 名の小団体で、バスでなく 2 台の乗用車に分乗して行くこととなる。1958 年 1 月 25 日(火)午前 9 時出発、夜オハイオ州コロンバスのオハイオ大学学生寮泊。二段ベッドで寝たが、夜中に上段に寝ていたのが寝惚けてか落っこちて大きな音を立てびっくりして目が覚める。幸い怪我もせず無事。翌日は朝早く出発、夜 12 時近くにワシントン DC 到着。一行は YMCA のチェアマン夫妻がリーダーで 4 名が国際学生、内 2 名が日本人、三共製薬から留学の阿倍さんと小生、他はノルウェーとイスラエル、米国人学生 6 名内 2 名が女子。翌日から上院議員のダグラス氏のオフィスを訪ね話を聞き、保健教育厚生省、VOA 放送局、議事堂では上院の会議を傍聴、夜は YMCA でワシントン商

工会議所の教育担当者と食事を共にしディスカッション。この担当者が話しの中で戦時中の事に及び、日本の戦闘機をジャップファイターと表現したのを後で米国人学生が気遣って不愉快でなかったかと心配していた。更に次の日はホワイトハウス、最高裁判所、ワシントンメモリアル、リンカーンメモリアル、又国会議事堂でニクソン副大統領の事務所を訪ね生憎不在だったが、小生が副大統領の椅子に座らせ皆で写真を撮った。アイゼンハウアー大統領も兄弟の葬式で留守だった。その他分散して数人で日本大使館を訪れたが、東京の米国大使館から想像していた為か誠に貧弱で、日本の国旗すら掲げて居らず、中を見学したいと申し入れたら、若い館員が嫌々ながら文芸春秋を片手に持ったまま案内してくれた。日本の紹介をするパンフレットも置いてない。米国大使館とは雲泥の差でがっかりした。ワシントン市内に日本食の料理屋があり久しぶりですき焼きを食べたが、味が薄くこれ又失望させられた。おまけに2ドル75セントもした。それでもアメリカ人も入って流行っている様子。4日間滞在して帰途に着き、2月2日無事ミナワに戻った。

二学期が始まって間もなく3月1日の週末、新入りのプレッジは全員帰宅させられ、先学期入寮のプレッジ我々6人のイニシエーションが行なわれる事となった。こちらは何が起るのか全く見当がつかなかったが、米国人学生は知っているようだ。アクティブの命令で、先ず全員素っぱだかにされ、ジャガイモの袋を逆さまにして首と腕が出せるようにしたサックドレスを着せられた。更に煉瓦1個を渡され、肌身はなさず持っている様に命じられ、口は一切きいてはいけなと厳命された。まずやらされたのは家の中の掃除、隅々まで綺麗にしろということで午前中掛かって磨き上げる。この間隙を見てはアクティブが煉瓦を盗む。盗まれると罰として唐辛子のピクルスを口に入れられ、良く噛めといじめられる。昼食はスパゲッティ、ただし大きな金属のプレートに山盛り

にしてテーブルの下に置かれ、犬のように手を使わず口でかぶりついて食べる
との命令。午後は更に種々の難題、地下室のコンクリートの床の上で裸の尻で
氷に座り滑る競争、吹き抜けの階段下のロビーに寝かされ上から生卵を割って
落とされ口で受ける、イリヤックというイリノイ大学が開発した巨大な計算機
で予め答えを出してある、30桁50行の足し算を鉛筆一本で暗算させられる、等々。
この暗算では小生は日本から持って来た算盤を使って宜しいとなり、適当に区
切って足し算し、約15分で答えを出したら、イリヤックの計算機で問題作成し
た時間より早いと驚かれた。夕食は正式ディナーと称してきちんと座りアクテ
ィブが次々と料理を出してきたが、これが種々の食用色素を使って毒々しい色
の品々。ミルクは青、ビフテキは緑、マッシュポテトは赤、とても食欲が出な
い。しかももったいないと食べることを強制される。食べたはいいが、とうと
う一人はもどしてしまった。後で聞いた話したが、あるフラタニティーのイニ
シエーションでは金魚を食べさせたとか。夜は正式メンバーとなる焼印を押す
と脅され、一人ずつ暖炉を赤々と燃やしたりリビングに引き込まれ目隠しをされ
て焼きごてを当てるとサックドレスをまくり上げられ、ハその辺りに押しつけ
られたのは氷、一瞬ひやりとさせられたが。夜寝床についてからも夜中に点呼。
その際煉瓦を盗られていたのが多数、皆唐辛子ピクルス。朝起きてからやっ
と24時間のイニシエーションは終了。皆シャワーを浴びてネクタイシャツ、
ダークスーツで正装、わざわざミナワの先輩もシカゴから来て、又ミナワの顧
問の教授も参加してアクティブへの任命式が行なわれた。アクティブの証明書
に添えて小粒の真珠ルビーをちりばめたピン、パドルを受け取った。このピン
は学生の間では、婚約の一步手前の段階に入る時、相手の女性に与えるのに使
われる。兎に角無事アクティブとなれたのでこれからは家の掃除はしなくても
済む。アクティブとしては時にテーブルマスターの役を勤め、手を挙げて食事

や飲物の追加を要求する。水曜日の夕食にはプレッジは蝶ネクタイを付けねばならなかったがこれも免除。

8. サマーキャンプ

学校の方も一応順調に進み、6月に二学期が終了、引き続きサマースクールに出席した。試験が終わって寮友ラルフが学校で飛行機操縦の免許を取得したので飛行時間を稼ぐ為次々とミナワのメンバーを2ドルのガソリン代でセスナに乗せるのに便乗し、空からの大学の写真を撮ったりした。

学期末の約10日間の休みには、ミナワの寮友ダンとサムの家を訪れた。ダンの家はピオリアにあり父親が工場長しているキャタピラー社を見学したり、スタッカーレースと云う古い車を使ったレース、そのすさまじいにつくづくアメリカ人のエネルギッシュな面を見せつけられた。ハンドルをきり損ねて転がるものや、柵にぶつかるもの、最後には2組に分かれ互いに車をぶつけあって他の組をつぶす競技等全く日本では見られぬ光景。このレースは本式のものではなく寧ろ草競馬といった所だから全く驚き。サムは6月農学部を卒業、農家の出身で、卒業祝にフォードのオープンカーを両親からもらった財閥。家はピオリアから15マイル、北京の丁度裏側になるのでペークンという名をつけた小さな農村出、彼の家は畠300エーカー、乳牛24頭、食用牛30頭、その他豚、鶏等沢山飼っていて、隣が一軒見える位置にあるという完全な農家。トラクターが3台あり父親、サムその他2、3の近所からの手伝いで経営している。彼の家の地所の中には一寸した池があり、釣りが楽しめ約1フィートの鯉のような魚が釣れた。家は少し古いが大きく中々立派で、日本の農家とは全然異なり寧ろ一寸した財閥の感じ、でもこれが平均的農家との事。何が好物かと聞かれ、フライドチキンと答えたら、お父さんが早速庭で鶏を2、3羽捕まえて鋭い刃物

で首を切った。首の無い鶏はちょんちょんと跳ねてからばったり。これをお母さんが料理して夕食に出てきた。なんとも可哀想で食べづらい。お母さんは綺麗な人で、彼の妹も高校生だが中々の美人。楽しい夏休みの一時だった。

さてかねてからノースcottさんに云われていた、メソジスト教会のキャンプにカウンセラーとして参加する事となった。送られてきたバス、鉄道の切符は全て牧師同等の割引、鉄道とバスを乗り継いで、デトロイトの近くミシガン州のチェルシーにきた。予め到着時間を知らせてあったので、女子大学生二人がバス停で待っていてくれた。このキャンプ場はミシガン州のもので、シーダーレークと云う小さな湖の辺にキャビンが散在し、中央にダイニングホールがある。非常に広い地域がキャンプ場になっていて、深閑としている。最初の週はジュニアで 12-15 歳の子供約 30 名が親に連れられて来た。子供達は4つのグループに分けられ、各グループには男女各1名のカウンセラー（大学生）が配属され、種々指導、食事の作法等も教える。全体の責任者もミシガン大学の学生で、その他キッチンで働いているのも学生、全て学生で運営されている。小生は国際カウンセラーとして各グループを巡回、日本のことなど子供たちに話す役。中央に近いキャビンを全体の責任者ローリーと一番若いダンと三人で使う。朝7時半起床、8時半朝食、食後歌を歌って後2時間程は静かに各自勉強、11時から水泳、昼食後は講義や工作をしたりスポーツをしたり、ティビーと云うインディアンのテントを組み立てたり、野外で炊飯、ボート旅行、近くの山に行きテントで一泊したり、夜はキャンプファイヤーを囲んで話しを聞いたり歌ったり、と久しぶりに子供相手にのんびりとした生活を楽しんだ。時間もゆったりあるので、図書室にあったジョンガンサーの書いた、インサイドエーシアを読んだら、近衛文麿がプリンストン大学に留学、1年目に新入生で誰が一番出世するかという人気投票をしたら、近衛が一番となった、しかし1年後近

衛は落第して日本に帰った、と書かれていた。

1 週、2 週は子供達のキャンプだったが、第 3 週は青年グループで 18-23 才のキャンパー約 35 名、学生、教員、オフィスガール、工員等、職業は様々だがこの州のメソジスト教会に属する育年達。テーマも具体的に、メソジスト教会が戦争、平和、労働組合、喫煙、飲酒等に対して如何なる立場を取るか、又取るべきかというような討論を行ない、司会の牧師は 30 代の若い人だったが、偶然母校青山学院に J3(宣教師実習の学生 3 年間日本で奉仕)で来ていたデサテールの友人だった。デサテールは今ランシングの大きな教会の副牧師をしているとのこと。これら若い人たちは話し相手として面白かった。グループの前で日本の話しをしたが、中には日本の地理的位置を知らず、日本は中国のどこにあるのかと云う質問もあった。又原爆を投下したことをどう思うかとの質問を受け、特に恨みに思っていない、もし日本が持っていたら、遠慮なく使っただろうと答えた。戦時中の我々の敵愾心を考えると、終戦間際に家にあった小刀を研ぎに出し、本土決戦の際は中学生ながら切り込みをしてやろうと準備していた事なども思いだし、戦後の進駐軍の穏やかな印象が、鬼畜米英と思い込んでいた日本人の考えを改めさせられた事なども話した。参加者の一人がモーターボートを持ってきていて、水上スキーを楽しませてくれた。生まれて初めて水上スキーをやったが、雪上スキーで馴れていたせいか一度で立つことが出来、例外だと大分おだてられた。

このキャンプ場から 30 分くらいドライブした所にミンクの飼育場があり約 1700 匹のミンクを飼っていて、成長したのは猫位の大きさと足が短く胴長の可愛い動物だが、性質はとても獰猛でうっかり籠に指でも入れると食いちぎられるとの事。仲間同士でもすぐ噛みつき合うので籠に一匹ずつ入れてある。餌は牛馬鳥魚の生肉でそれやミンクの糞で臭いこと夥しい。ミンク一匹が 40〜

50 ドル、毛色も色とりどりで白茶灰黒ぶち等、奇麗な毛並み。見学の最後に毛皮を剥ぐのを見せてくれ、お尻から裂いてまるで人がセーターでも脱ぐようにするすると完全な毛皮が取れる。この日の昼食はこれら毛皮剥ぎやミンクの臭い、餌にする牛馬の生肉臓物等ですっかり食欲減退。ミンクのコートは素晴らしいが、蔭のこうした様子を考えると余り魅力を感じなくなった。

キャンプ終了後、責任者のローリーに誘われてデトロイトの彼の家に数日滞在した。ローリーはミシガン大学の四年生音楽教育専攻、父親はノースウエスタン大卒の牧師でノースcottさんを良く知っている由。9月2日は近くでミシガン州のステートフェアがあり一家揃っての見物に同行。翌日はデトロイトの自動車工場、フォード博物館を見学、キャンプで知り合ったナンシーを巨大なGM オフィスに訪ねたりして過ごした。6 日土曜日デトロイトよりグレイハウンドのバスに乗り帰途に着く。デトロイトのバス停で偶然サマースクールで一緒のクラスだったオマハ校の助教授と会い、シカゴまで同行。シカゴ-シャンペイン間はエルヴィス・プレスリーのセカンドカズンと称する青年と隣り合わせ。彼は 17 才、3 年前に(14 才)結婚、子供が三人あるとの事、13 時間のバス旅行も退屈もせず過ごした。

9. ミナワの役員

二学期も終わりに近づいた 5 月、来学期のミナワの役員選挙が行なわれることになった。候補者を何人が指名し名前を張り出しておいて投票する。結果としてプレジデント、ダン ネルソン(モーリン) バイスプレジデント、タン バーテル(ピオリア) チャブレン、レニー マイヤー(シカゴ) トレジャラー、コミサリー、ビル ジョンソン(モーリン) セクレタリー、サージェントアーム、ベン トクナガ(トウキョウ)以上五名が新役員となった。サージェン

トアトアームと云うのは寮の警察官のような役目で、前にふざけて取っ組み合いをした時、足を掛けて大きな男を倒したので柔道でも出来ると思われたらしい。実際には真面目なクリスチャン学生の寮だから力で押さえるような事態は起りえないが、たまに騒いで煩いような時には取り締まる役を果たさねばならない。9月の第2週皆続々とミナワに帰ってきて、先ず家の掃除をしたり、学課の登録をしたり15日(月)から始まる授業の準備をした。

今年度の新入生は9名、皆高校卒業したてのフレッシュマン。種々寮生活に馴れるよう指導の貴任も果たさねばならない。アメリカの学生は一体に大人で皆しっかりしている印象を持っていたが、矢張り案外若さや子供っぽい面もあるのを知った。ジョン・オルソンはモーリンから来た大きな男だが、初めて親許を離れてくらすので、ホームシック気味。彼はテニスをやるので時々引っぱり出してやり、丁度学校内で始まったテニス大会にダブルスを組んで出場、初戦は6-0、6-0で快勝、次々と勝ち進みベスト8まで行っったが、ジョンはホームシックがつのり、とうとう退学して家に帰ることになってしまった。わずか3、4時間で家に帰られる距離なのに、我慢が出来なかったようだ。

ミナワの役員になったせい、又学業も馴れたせい、種々の活動に引っぱり出される事が多くなってきた。先ずはミナワが編成するゴスペルチームの一員として、近辺の教会に行き、賛美歌の独唱や、時に日本のキリスト教会の現況の話などさせられた。泉派は違うが、バプティストの年会にも引っぱり出され、何か話せと言われ、ミナワに住むことになった日本でのスポンサーとの経緯など偶然の出会いを話し、ミナワの生活等報告した。近くのライオンズクラブの集会にも呼ばれ、日本の話しを持っていたスライドを交え話したが、この時迎えに来てくれた人は職業を聞いたらアンダーテーカーだと云う。迎えにきた車はステーションワゴン、これは死体を運ぶのにも使うのではないかと、

いささが気味が悪くなった。

ミナワでも問題が無いわけではなく、プレッジの二人が寮の規則に従わず、前々から注意を与えて来たが遂にハウスミーティングで退寮を命ずる事に決定、五人の役員で両名を呼び申し渡したが、二人共素直には聞かず、特にその内の一人フットボールの選手は脅し文句を吐くような態度を取った。更にハウスミーティングでも検討した結果、特に悪いことをしたわけではないので、今学期間は住む事を認める前提で規則を守ることを条件に夜中の 2 時半頃まで話し合ったが、へ理屈を述べいくら説得しれ入も議論してもウチがあかず、何か異なった次元の人間と話しているような状態だった。結局この二人は次の学期の終わりまで住んだが、投票の結果アクティブにはなれず、出ていった。先学期に入寮してきたプレッジのイニシエーションは我々がやられたような事をやったが、一つ日本的な難行として、大豆をお箸で摘んでカップに入れさせる事を加えた。案外上手にやられたのでいささがっかり。

11 月 20 日(木)にはルイ・アームストロングの演奏会を聞きにいった。1 ドル 75 セントの切符代をふんばつ、日本で映画やラジオで強い印象を受けていたが、目の前に実物が現れたらそれ程に思えなかった。口を傷つけたとかで、余りトランペットも吹かず、しわがれた声で盛んに歌い、パートナーの太った女性がよたよた踊るといった調子で、映画やラジオは実際以上に誇大化するのだろうか。か日本人に好意を持っていて、戦前カリフォルニアで日本人がオレンジを栽培していた頃は品質がとても良かったが、日本人を強制移動させてから質が落ちたと言う。もっともイリノイ州では日本人に対する偏見が全く無く、戦時中イリノイに移動させられた日本人は非常に良い待遇を受け、終戦後解放される時、州知事に車を贈ろうとの動議があったと聞いた。レニーには小学生の妹がいて、小生をクリスマスの飾りの宿り木の下に引っ張ってゆき立たせて

から飛びついてきてキスをしてくれた。宿り木の下に立っている人にはキスをしてもいいという習わしがあると聞いていたのでなるほどと思ったが、多分これが生まれて初めて女性とキスをしたことになる。シカゴ滞在中はこの他しばしばキャンパスでデート、サンクスギビングの休暇はレニー・マイヤーの家に招かれシカゴで過ごした。レニーの父親はシカゴで文房具店を経営、まず中産階級といったところ。ドイツ系のせいとやミナワの行事でパートナーとして付き合ってもらった女子学生コーネリアの誕生日にも招かれ、彼女と双子の姉妹のバースデーを祝った。2月7日にはYMCA主催のインターナショナルウィークのジャパンナイトが行なわれ、300人を超える盛況、90セントの切符は3日前に売り切れ、すき焼きを食べてから国歌を歌い、折り紙、ハーモニカ演奏、民謡合唱、盆踊り、皿回し、等家族を含めて百人強の日本人がいるので芸達者な人もいて中々好評だった。この会合のマスターオブセレモニーをやらされ初めての経験、何とか無事に務めた。

この頃こちらの新聞、ラジオ、雑誌等で、日本の当時の皇太子の婚約が報道され、話題となったが、正田嬢は深沢さんのクラスメートだった由、中々良いお嬢さんらしい。皇太子も目が高い。留守宅にも取材の記者が来たそうだ。

12月20日去年と同じようにミナワの寮友が日本への電話をプレゼントしてくれ、朝7時に自分で申し込みシカゴ、オークランドへと交換嬢が次々とリレー、一旦切って待つこと30分電話が繋がって一年振りに家族と話した。今回は太平洋が夜で電波に具合が良いのか突に良く聞こえた。何度ももしもしを繰り返したので、ミナワでももしもしが流行ってしまった。

10. 東部旅行と実務経験

学期末の試験も無事終了、一応マスターの学位に必要な単位は取得、あとは卒論のみとなったので、折角の機会だから米国東部を見てこようとバス旅行を計画。経費を節約する為昼間は先々の見物、夜はバスで移動と考えて切符を購入、まるで手帳のような切符となった。シャンペインを1月24日、12時半に立ち、インディアナ州のリッチモンドを経て、夜行バスで翌朝五時半ピッツバーグ、世界一の鉄の都、工場の見学が出来ないのが残念。午後1時半にはフィラデルフィアのインディペンデンスホールと自由の鐘を見て、午後4時バスに乗り夜にはニューヨークに到着。氷川丸で一緒になった岩井産業の平井さんのお宅に泊めて頂く。ここで三泊してニューヨーク見物、エンパイアステートビル、自由の女神像、ラジオシティのショウ、セントラルパーク等々ニューヨークの代表的なものを一回りした。その後小生の会社が技術提携をしているドルオリバー社の本社があるスタンフォードに行き挨拶、研究所を見学。又夜行バスでボストンに向かう。ボストンでは高校時代の親友でMITのドクターコースにいる春田君を訪ねた。彼は寮長をしているとかで、寮生の相談にのったりで忙しくしていた。既にガールフレンドも出来ているが、まだ結婚する決心がつかないそうだ。更にハーバード大学に行き氷川丸で同室だった川又助教授に会う。広中君は生憎不在で会えなかった。再び夜行バスでバッファローに行き、ナイアガラ滝を見る。さすが壮大で息をのむような景観、これぞ世界一の滝だと思った。カナダ側にも渡り心ゆくまで鑑賞出来た。バッファローからは一気にシャンペインに向かい、2月1日に帰着。

フルブライトの規定で学業終了後、半年の実務訓練を受けることも出来ることになっているので、ニューヨークでは職業紹介所を訪ね就職の努力をしてみた。小さな貿易会社で日本向けの輸出をやっている会社に口があったが、シャ

ンペインに戻ったら、町の中にある衣類の会社を紹介された。この会社は卒業式に着るキャップやガウンを製造、貸し出しをする会社で全国的に活動している。兎に角米国の会社の実情に触れる機会があるので、夏まで働かせてもらう事とした。牧師や大学教授の着用するキャップ、ガウンを作るが、主な事業は卒業式の際卒業生が着用するキャップとガウンの注文を受け、サイズ、型、キャップに付けるタッセルと云う房の色等 IBM のカードに記載しコンピューターで処理して出荷先の学校宛に纏めトラックで送り貸出すことで、小生は IBM カードの記載、点検をやる仕事をする事となった。仕事は単純で問題なく、久しぶりに毎日会社に出勤し働く生活に戻った。会社の上司も同僚も皆親切で、仕事のやり方を指導してくれ、又合間を見て IBM の機械がどのようにカードを処理するか見学、解説をしてもらい、非常に能率的に仕事が進められるのに感心した。

この実務訓練中も学生生活の延長と考えてミナワの役員会は居住を認めてくれ、そのまま住み、ミナワの活動にも前より時間の余裕があり活用される機会が多くなった。もっとも週日は朝 9 時から午後 5 時までの勤務、通勤にはビルが自転車を貸してくれ約 20 分、弁当持参で行く。週末はミナワの活動に参加し、朝食会のスピーカーをしたり、教会の礼拝をミナワがゴスペルチームとして引き受けその一員として日本のキリスト教会の紹介をしたり、諸美歌の独唱をしたり、時にはハイスクールの会合で日本の話しをしたりと結構忙しく過ごすようになった。ハイスクールの集会は初め 25 人くらいのグループとの話しだったが、行ってみると南イリノイのセイロムと云う町で、町の人々も交え約 100 人位がハイスクールの講堂に集まり、些か面喰らったが何とか日本の話しをして切り抜けた。さて勤務をして初めての給料を貰ったが、税金を引かれても週 45 ドル、日本での給料の一カ月分と同じ、もっとも生活程度も違い購買力は少し

小さいと思われるが、経済力の違いを感じさせられた。時間の余裕も出来たので、日本から新聞の縮刷版を送ってもらい多少なりとも日本の現状を把握して少しずれた感覚を日本的に引き戻し、帰国準備をすることとした。イースターの休みもミナワに一人残り勤務を続けることとなった。大分あちこち誘われたが、会社は忙しい時期となり、馴れてきたので新入の連中に仕事を教える事もあり、抜ける訳にはいかずと云うところ。会社の中での友人も出来、その内の一人はノースcottさんを知っている取締役で、種々ノースcottさんの事を話してくれた。ノースcottさんは大分周りから引退するよう迫られ、本人にその気がないので具合の悪い立場にある、しかし又多くの人に慕われてもいる。ノースcottさんは非常に記憶力が良くある時 25、6 人を一度に紹介されて一度で全部の名前を覚えてしまい、後ろを向いて声を聞いて今のは誰だと名指したとのこと。

3 月 15 日の週末はミナワを紹介してくれたバプティストステュデントセンターのゴスベルチームに参加、ラムゼイと云う約百哩西南の町で過ごした。男女 3 名づつ 6 名でハイスクール生徒の集会、朝夕の礼拝を受け持ち、歌の指導、独唱、テストimoni等をした。町は 800 人程の人口の小さな集落、信者の一人が一行を泊めてくれた。前夜年齢を聞かれ、実は明日が誕生日で 28 歳になると云ったため、昼食の時大きなバースディケーキに 28 本のローソクを灯したのを出され感激。

氷川丸で一緒に来た深沢さんも、6 月に卒業したら矢張りどこかで勤務したいとの事。この深沢さんの同級生美智子さんと皇太子の結婚のニュースはこちらでも第一面で報道され、特に落第した学生が馬車を襲った記事はシャンペインの新聞でも写真入りでトップ記事になった。宮内庁長官が国会の委員会で、皇太子の結婚は恋愛結婚ではないとか云ったそうだが、シカゴトリビュンは皇太

子が恋愛結婚と認めた事を報道。事実を事実として認めない狭い国で、狭い考えに凝り固まって人々が互いに争っているのは情けない。ハワイの二世の友人が大福を持ってきてくれる。ルームメートにも食べさせたら一口で止めてしまった。日本のものは中々アメリカ人の口には合わない。前にも日本から送ってきた御家宝を食べさせたらドッグフードみたいと評したのがいた。

会社の方は学校の卒業式の時期が近づき忙しくなってきた、5月に入り夜10時までのオーバータイムが2週間程続いた。学期末も近づき学生達も騒ぎたくなったのか、大雨が降りミナワの前の道路に4フィート程の水が溜まったときには、通りで泳いで大騒ぎしていた。天気の良い日は水合戦、うっかり学生達の集まっている側に行くと水をかけられる。夜には女子学生寮へのパンティライオット、男子学生が押し寄せてパンティを要求すると応じて投げるのがいる。暑さも加わってきたが、オフィスは冷房が効いて楽だ。

11. 帰国準備

6月上旬実務経験は終了、いよいよ帰国の準備を初めた。夏休みは昨年の夏に呼ばれたメソジスト教会のキャンプにカウンセラーとして参加し、その後シカゴで用事を済ませ周辺の知人を訪ねて、9月初めに一旦シャンペインに戻り荷物を纏めたら、アラバマのヒントンなど知人に会い、氷川丸でシアトルから出帆と予定を立てた。最初のキャンプはイリノイのブルーミントン、約125人のジュニアハイの生徒達に日本の話しをしたり柔道の型を教えたり、日本の歌を歌ったり、中には日本語で腕に名前を書いてくれと云うので刺青のように書いてやったりと、呑気な役目。ブルーミントンからインディアナ州のリーズバークへ夜行バスで移動、途中ミナワに寄り留守中の手紙を受け取る。その手紙の中に、会社の常務の娘さんを貰わないかと云う話しが留守宅に持ち込まれた様子、

好きな女性がいるらしいと云って断って貰うよう急ぎ返信。インディアナのキャンプ場は今までとは全く異なり、立派な別荘風の建物が湖水の周辺に一群となって町を形成していた。小生も中心にあるアドミニストレーションビルの二階でホテルのような立派な部屋を与えられ、食事は別棟のキャフェテリアで好きなものをいくらでも食べてサイン一つすればよく、至れり尽くせり、残り少ないアメリカ生活を最も贅沢に楽しめた。キャンパーは高校生で各教会から牧師が引率して参加、全体で約 500 名。牧師の数だけでも 20-30 名はいる様子、更に関学出身の日本人牧師や、大阪に居たミショナリーも来て、ちょっとした日本オンパレードとなる。任務も今迄とは違い、毎日 3 時間のクラスをミス・スミスという高校の先生をしている娘さんと受け持つだけ、ただ同じ話しを 3 回繰り返さねばならないのは閉口。大きな講堂で 500 人以上の聴衆を前に独唱するのは初めて。キャンプの終りが近づいた夜の集まりでは、高校生に将来フルタイムの教職に就く決心を迫り、約 70 名の男女学生が牧師、宣教師として献身する事を誓ったのには感銘を受けた。しかし中に身体障害のある女子が断られるということもあった。こうしてのんびり過ごしていた所へ突如日本の会社から電報があり、会社の部長二名と三井生命の専務が米国視察に行くので、9 月 19 日にシアトルで出迎え、各地を回って 10 月 5 日に欧州からニューヨークに到着する社長と合流するまでお供せよ、との指示。急ぎ船便の取消や必要な手続きをする。更にキャンプは追加でイリノイのイーストセントルイスの大学構内で行なわれる老人対象のキャンプと、ケンタッキーマジソンビルの青年キャンプへの参加を要請され、予定は全く変更となった。その後、イーストセントルイスのキャンプに参加、老人のキャンパーが到着した時、カバンを運んであげたらチップを出され断るのに苦労した。ケンタッキーでは眼科医の家に宿泊、この家は建ててから 75 年になるという古い大きな家。ケンタッキーは南北戦争

で分裂した州だけあって人種差別もイリノイ等とは違い根深く、この家の奥さんにも強い差別主義者だった。彼女の理屈にも一応の道理はあるが、ちょっと変わった経験をした。

この後又オハイオのキャンプにも参加する事になり、このキャンプではビルマ人の政府官吏と知り合い、帰国途中日本に寄るとの事で、留守家族を紹介、希望の国際キリスト教大学等を案内してもらうよう手配。ビルマの対日感情は余り良くないそうで、少しでも良い印象を与えられたらと願った。8月28日オハイオより戻りミナワで帰国準備を始める。誰も居ない寮で荷造り、日本から持ってきたレコード、スライド、日本民謡の楽譜、竹製のテニスラケット等それぞれ適当な相手の名前を付けて置いてゆく。卒論を既に提出し全て完了したと思って居たら、学位取得の手続きが必要との通知が日本に行き転送されて居た。急ぎ手続きをして、マーケティング修士を授与された。毎日荷造りや種々の手続き、切符の手配等忙しい日々を送りながら、ミナワの寮生はまだ帰ってこないで、町の知人やミナワの結婚しここに住んでいる夫婦等方々からの招待で食べ歩く。思えばミナワでの2年間の生活は、今迄の人生最良の年だった。例え再びアメリカに帰って来ても二度と同じことは繰り返せないと思えば今の所を去るのは感慨一入である。

12. 帰途

9月7日シャンペイン駅でイリノイセントラル鉄道に乗り込み南下する。8日アラバマ州バーミングハムでヒントンさん夫妻に迎えられ、ドラのお宅に二泊。ヒントンさんは牧師の継父を戦後会ったことも無いのに、時々小切手を送って来て教会の支援をしてくれる人。ヒントンさん自身も牧師、教会の子供達の集まりでは日本語で賛美歌を歌わされ、喜んでくれた。子供のいないヒントンさ

んに息子のように歓待された。11 日ニューオリンズへ、観光バスで見物、子供の頃読んだトムソーヤーの冒険の舞台。地下水が多いため、お墓が地面の上に作られている。翌日はダラスへ夜行列車で到着、14 日にはグランドキャニオンを見物。15 日はロスアンゼルスで、母の同級生の娘さんが 2 世と結婚、幼なじみでもある君子さん宅で世話になる。18 日サンフランシスコ経由 19 日シアトル着、オリンピックホテルに入り、夜飛行場に三人を迎えに行き、いよいよ社用旅行となる。部長も専務さんも日本にいる時とは違い肩も凝らずに済む。当地では三井物産が非常に歓待してくれ、支店長代理以下二名が付きっきりで毎日見物に食事にと大名旅行となる。大型モーターボートを借りてワシントン湖を一周。初めての飛行機旅行は一等に切り替えて贅沢な旅行となりシカゴに飛ぶ。シカゴでは三井生命の新社屋に採用予定の、吸収式冷房設備を使っているビルの視察をする。次にデトロイトに行き矢張り建物の視察、丁度週末のためフォードの博物館を見たり GM の巨大なオフィスビルを見る。前夜連絡を取った去年の夏キャンプで知り合った GM 勤務のナンシー嬢が見物を手伝ってくれた。28 日 いよいよニューヨーク入り。社長がヨーロッパからクイーンメリ号で到着、ワールドファストリアホテルに宿泊、一同で訪ねる。技術提携をしている米国の会社の日本駐在員だった男も顔を出し、久しぶりの談笑。社長の決定で結局米国内の旅行の全部をお供することとなる。帰国の際は、日本郵船の佐渡丸がニューヨークからパナマ運河経由で出港するのに乗ろうと計画していたが駄目になった。その代わりボストン、ナイアガラ、トロント、モントリオール、クリーブランド、フィラデルフィア、ワシントン、マイアミ、ヒューストン、ダラス、グランドキャニオン、ラスベガス、ロスアンゼルス、ヨセミテ、サンフランシスコともう一度、大きくアメリカを一回りすることになった。各地では大体三井物産が今度は社長もいるので大変なもてなしをしてくれ、正に大名旅行。

ナイアガラの滝を見物しモントリオールでは紅葉狩り、さて再び米国へ戻ろうと思ったら空港で入国審査に引っ掛かる。指摘されたのは米国ビザの延期はしであるが、出入りを繰り返すことは出来ない条件、それで急ぎ米国領事館に行き手続きをするようにと言われ単独引き返す。領事館ではビザ申請は長蛇の列、飛行機の出発時間には間に合わない。やっとビザを貰って空港に行くと、とっくに出発してる筈の一行が待合室にいる。何のことはない、予定の便が都合で飛ばなくなり、次の便を待つことになった由、御蔭で置いてきぼりを食わずにすんだ。マイアミには現地に支店が無い為、三井物産の人がわざわざ同行。ヒューストン、ダラスでも三井物産のお世話になり、この地区には会社の製品である鋼管が油田用に輸入されていた。グランドキャニオンは我々日本からの者だけ、見物に雇ったタクシーの運転手を説得、ラスベガスまで行く。一台のタクシーに五人で乗り、助手席に座った学生相撲あがりの巨体の社長の膝に約 3 時間乗るはめとなった。ヨセミテのエルキャピタンと云う岩山は圧巻だった。翌日サンフランシスコに出て全ての旅程を終了、日本からの一行と別れ単身ロスに戻る。NYK で切符を受け取り、その足で三井物産、三井船舶を訪ね、頼まれた仕事と挨拶を片づけ、更にブロードウェイの百貨店で有り金全部をはたいてお土産を買う。佐渡丸はサンディエゴから出帆するので、ロス一泊後バスで南下、10 月 31 日乗船。この船は貨客船なので荷物が主体となり、乗客は 10 名のみ。11 月 1 日出帆予定が週末にかかり積荷が遅れ 3 日となる。船のルームメートは三菱電機からの派遣留学をした船川氏、出帆が遅かったので二人で町の見物に毎日出かける。船の食事は悪くはないが、氷川丸程ではない。卵とハムは日本のもので生臭い。積荷の綿を盛んに積み込んでいるが、雨が降れば更に遅れる由、でもどうやら 3 日午後 2 時出帆、到着港は横浜と確定、到着日は 16、17 日とのこと。船は氷川丸よりも新しく、速力も早かった。乗客はアメリカ人夫

婦 1 組、オランダ人夫婦 1 組、婦人宣教師 1 人、メキシコのカソリックのシスター 1 名が日本の孤児 2 名を同伴、合計 10 名。食事は食堂で船長と一緒に食べた。船は順調に航海、無聊を慰める為、船倉にある荷物からレコードを出して貰い聞いたり、ゴルフクラブも出して機関長が釣り糸を取り付けたゴルフボールを甲板上で打ったり、若いメキシコのシスターと人生論を戦わせたりした。日曜日は礼拝が宣教師の司会で行なわれ、これには流行りのエキュメニカルムーブメントでカソリックと合同でやったらと提案したが許可がないからと不成立。順調な船旅が続いたが、横浜着の数日前台風が近づくとの事で、やや進路を変更したが、夜半になって船が揺れだし丁度船尾が振られる様な揺れとなり、どこかで食器が落ちて割れる音がしたり船の軋む音が聞こえた。同室の船川氏は船酔いとなり小生のベッド際にある窓から顔を出して吐こうとしたが間に合わずベッドの上にもどってしまった。一夜明けたら暴風圏から抜けたのか、どうやら揺れも収まってきた。11 月 16 日、予定通り横浜港に到着、家族や会社の上司先輩が船に乗り込んで来て帰国を歓迎してくれ、2 年有余の留学は無事終了した。



エピソード

帰国して数ヶ月後ミナワに入寮した当時のプレジデントだったノームリンブラッドが海軍士官となって横須賀入港の米国軍艦で来日、銀座の料亭で食事を共にし再会を楽しんだ。二年後、しばしばデートしたコーネリア・カーネス嬢が香港で教師になる赴任途中、東京に立ち寄り、見物の案内をした。更に数年後ビル・ジョンソンが空軍将校として日本に駐在、当時のベトナム戦争の為にしばしばハノイに飛んでいた。1967年にはイリノイからシカゴのムーディー神学校に転校、宣教師となったラルフ・ジェコブソンが家族を帯同フィリピンに行く途中東京に寄り、母に乳飲み子を預けて秋葉原に買物に行った。化学専攻だったビル・コルビーはその後医学部に進み、医者としてアフリカに医療伝導に行った由。建築科専攻のチャック・フックは奨学金を得てフランスに留学した由。1980年会社が米国ハーキュリーズ社に技術輸出をしてインディアナ州に工場建設をしている際、様子を見に行ったついでに、隣のイリノイ州まで車をとばしシャンペイン=アーバナの町を訪れた。グリーン通り 401には銀行が建っていてミナワは跡形も無くなっていた。